

# 都 市

## 人 間 と 自 然 の 接 点

### 本 谷 勲\*

#### 要 約

わが国における自然概念は西欧的なものと、日本の伝統的なものとの混合物であり、公害・環境問題から高まった自然への関心に戸惑いをもたらし、一見、環境問題への私達の対応を混乱させているようにも思われる。西欧的な考えでは、自然は人間に対立する存在であり、しかも自然は人間に支配されるべきものとされる。日本の伝統的な、かつ多分にアニミズム的な考えでは、人間と自然とは同一であり、人間が動物に生まれ変わることもあり、植物や石も心を持つとされる。西欧的な考えでは人間と自然とは峻別され、人間の価値の認識にすぐれている。日本の伝統的な考えでは、人間と自然の連続的な側面の認識にすぐれている。

ところで異質な考えのないまぜであるわが国の自然観は、かえって「人間とは自然の歴史におけるひとつの発展段階である」との考えに導かれ得る特徴をもつと考えられる。そして、環境破壊の度を深めている今日において、この考えは自然における人間のありかたを展望する上で有効な基盤となるものと考えられる。それは、生物学上の生態系という自然の枠の中に、単に人間を閉じこめることで、環境問題の解決をはかるのではなく、人間の発展の方向で、解決しようとするのである。

このような人間・自然観のもとで都市を見直すことによって、都市問題にもひとつの対応がなされるであろう。

都市問題の多発化にともない、都市とくに大都市の存在そのものに否定的な見解が少なくない。筆者も数年前までは、おおむね大都市否定か、それほどでなくとも大都市見限りの考に傾いていた。しかし、大都市の否定のみでは、都市問題の解決につながらないばかりか、そこからの逃避になりかねないことに気づき、また、大都市否定は人間否定のひとつの表われであるとも考えるようになった。小論は、人間ないし社会の出現を、自然の歴史の必然的段階であるとみる立場にたつて、都市を人間ないし社会と自然との接点とみなして論じようとするものである。

#### 1. ないまぜの自然観、その欠陥と克服

60年代のわが国における経済の高度成長がもたらした公害・自然破壊から、人々は環境問題へ、さらには自然に対する人間の責任という命題にまで、関心を発展させてきた。環境問題、環境、自然、人間についてのおびた

だしい出版がなされていることから、この関心の発展をうかがうことができよう。ところで、単行本・雑誌などのこれらの出版物の中では、一般に自然の概念が複雑であることが強調されるのみで、今後の自然概念のありかたを述べているものは至って少ない。人々の関心の発展にてらしてみれば、多様な自然概念の今日的統合は、重要な課題であると言えよう。

自然という言葉や、辞書とが百科事典でひいてみるとその多義なことと、由来の複雑さにおどろく。例えば広辞苑によれば次のようである（用例略）；

①おのずからそうになっているさま。天然のままて人為の加わらぬさま。（副詞的にも用いる）

② (nature)

①人工・人為になったものとしての文化に対し、人力によって変更・形成・規整されることなく、おのずからなる生成・展開によって成りいできた状態。

②おのずからなる生成・展開を惹起させる本具の力としての、ものの性（たち）。本性。本質。

\* 東京農工大学・一般教育部

- ①造化の力によって成った一切のもの。即ち、人間を含めて天地間の万物。宇宙。
- ②精神に対し、外的経験の対象の総体。即ち、物体界とその諸現象。
- ③歴史に対し、普遍性・反覆性・法則性・必然性の立場からみた世界。
- ④自由・当為に対し因果的必然の世界。
- ⑤①まれにあるさま。万一。
- ⑥(副詞として)もし。ひょっとして。

また、例えば世界大百科事典(平凡社)によれば、「自然」の項(三枝博音)を240行余を費やして詳述しているが、大要は上記の広辞苑の説明と同様である。上記の広辞苑の説明のうち、最後のもの、③④⑥はわが国の古い用法であって今日では、もはや用いられていないようだから、小論の考察の対象から外してよからう。そうすると今日の<自然>という言葉は、日本在来の用法(上記の①)と、ヨーロッパの nature の二通りの意味において使用されていることになる。江戸時代に nature という概念が導入された時は、例えば「およそ物、覆載の間に散在して我が五官に触覚する者之を納都烏爾と謂う、万有の義なり(広瀬元恭《理学概要》上記三枝博音による)」というように万有と訳されたり、あるいは天地、万象、天然などと訳されていた。これが<自然>という言葉に統一された経緯について、三枝氏は、明治の終りより大正にかけての日本の自然主義文学に注目しており、柳父章氏は、それより早い頃の用法をあげている。これはこれで興味ある課題だが、今は、<自然>という言葉の意味は、nature の訳語と、日本語のもとの自然(じねん)の二通りであることを問題にしよう。

nature の意味は、詮索すれば広辞苑の解説でも6通りにもなるが、それらを煎じつめれば、また、一般に用いられている用法からしても、それは②⑥のような「造化の力によって成った一切のもの。天地間の万物ということになるであろう。それ故、日本語の<自然>の概念の複雑さは、訳語のもととなった nature が多義的であったというより、日本在来の自然(じねん)と nature が二つながらに使われていることに原因がありそうである。柳父氏は、「新しい nature の翻訳語としての意味と、古い伝統的な意味とが共存して」おり、「重要なことは、この混在という事実が、翻訳語に特有の「効果」によって覆いかくされている」と指摘している。筆者もこの指摘に全く同感であり、この状態をさして、日本語での<自然>は、在来の「じねん」の意味と nature の意味をないまぜにして用いている、と言いたいのである。

ところで、在来の「じねん」と nature には、広辞苑の説明の①と②からも明らかなように、<人為>的なものと対立する点では共通する反面、柳父氏が指摘するように、nature は人為(art, kunst)と対立するが同時に相

補的であり、nature は客体の側に属するのにくらべて、<じねん>は、むしろ主体・客体という対立を消し去ったような、主客未分の世界である、とも言える。それ故、じねんと nature のないまぜは、いわば次元の異なる、主体・客体峻別の概念と、主客未分の概念のないまぜにつながるのである。<自然>の概念を複雑にしている、ないしは曖昧にしている最大の原因も、ここに由来すると考えたい。

都市が人工的要素をいかに多く持つとはいえ、背景ないし都市の周囲の自然的要素を前提にしないわけにいかない。また最近では、都市自体の人工過大に対する疑問も出され、都市における自然が模索されている。そうしたなかで、自然概念の複雑・曖昧さは、現代都市の問題を理解する上で、抑制的な発想のもととなることはあるとしても、有効な視点を与えることはないようである。

しかしながら、ないまぜに気づき、異なる概念の由来を認識した上で、異なる概念を統合化することも、出来ないことではない。nature に対するヨーロッパの民族のみかたは、キリスト教的な人間・自然観に代表されるように、人間と自然を峻別し、かつ、人間は自然の支配を許されたものとされている。<sup>1)</sup>このみかたは人間の価値の認識にはすぐれている反面、今日の環境破壊への対応に鈍いところがある。他方、日本人の nature に対するみかたは、人間も動植物も非生物も同一視するような、アニミズム的なとらえかたが色濃い。このみかたは、人間と自然の連続的な側面の認識にはすぐれている反面、人間の自然史上の意義を曖昧にするところがある。

明治以来、今日の日本人は nature に対する認識においてヨーロッパ的なみかたを十分とり入れている。また、最近のヨーロッパ、アメリカでは、自然と人間との関係について、アジア的発想への志向が小さくない。欧米の自然保護運動の中でも、キリスト教的人間・自然観に対する反省、仏教の輪廻への関心が高まっていると聞いている。「人間も生態系の一員である」という主張は、生態学の中から発想されたのではない、輪廻的なみかたへの関心のあらわれではないだろうか。

このように見てくると、ヨーロッパ的自然観、日本的ないまぜの自然観の課題は、人間と自然の統合的なとらえかたにある、ということができよう。この場合、人間も自然の一部と言うのでは、課題に対する答とはならないだろう。人間も動物学的には哺乳綱・霊長目の一つの種であるところから、人間も自然の一部であるという考は間違いではないが、それは人間の動物としての側面に注目してのことであって、これで人間のすべてが規定しつくされたわけではない。「人間は自然から生まれ、反自然の方向に進んだ」という考も少くないが、これでも人間のすべてをとらえていない。小原秀雄氏は「今や自然は社会化されている」と指摘しているが、これこそ、

自然との関係で人間を正しくとらえたものと言うことができよう。あるいは林 淳一氏のように「自然の発展段階としての人間の存在」と言う方が一層明確かもしれない。すでに100年も前にエンゲルスもこのことを述べていた。

日本語の自然概念は上のような認識にすむ可能性を持っている。

## 2. 都市における新旧形態の重層的存在

都市というものは、人間のいろいろな生活様式のひとつと、平板的にみるべきではない。都市的生活といい、都市的機能といい、最新の形態をもつことで特徴づけられながら、より古い形態のものを内に蔵した重層的な構成を都市は持っている。しかも重層は、単に社会あるいは人間にとどまらず、人間以外の生物、自然的存在にまで連続している面を持っていることに注目したい。その例を、情報、物質代謝、土地について考えてみよう。

情報管理の高度化は、都市の大きな特徴の一つであろう。情報管理は、例えば、コンピューター使用に見られるように、都市を中心に日進月歩の観があり、今後ともその趨勢は続くであろう。しかしながら、注意すべきことは、一方で高度に機能化された管理体制がつくられながら、「旧態依然」たる情報管理も存続していることである。電気・電子機器の古い形態ばかりではない。ソロバンやメモ・ノートにたよる、あるいは暗記にたよる情報管理が将来とも存在するのではなかろうか。単にコンピューター化が及ばないためではない。また、最新、高度の情報管理の習得のための教育的配慮からだけでもない。現実のこととして、旧態のいろいろの形の情報管理が最新のものと並行して存続することを忘れてはなるまい。

生物学的には、人間の情報処理は脳のはたらきを中心とするものであろうが、それは人間に個有のものではなく、哺乳動物にひろく共通するはたらきである。そして、爬虫類、両生類を経て魚類にまでつながるものである。もっと一般化すれば、情報そのものがすぐれて生物的な機能であることからすれば、<sup>2)</sup> 情報処理の様式は脊椎動物だけに限られない広い裾野をもつと考えられる。

物質の代謝のいちじるしさも都市の大きな特徴のひとつとされる。大量のエネルギー、物資、水、食糧などの都市への流入と、都市からの多量の廃棄物、下水などの放出は、それ自体、都市問題の一つとさえなっている。しかし、物質代謝そのものは都市だけに固有の機能ではない。農村にも、いずれの社会にも物質代謝は存在する。社会ばかりではない。生物界では基本的なはたらきのひとつであるから、広く展開されているものである。都市においては、人口の集中、生産の集中、管理機能の集中

などがあるために、量的に巨大な物質代謝となっているのである。

物質代謝の内容も、エネルギーのように高度に「近代化」された形態のものから、食糧のように基本的には哺乳動物と変らぬ「旧態依然」のものまでが併存している。加工や貯蔵や輸送の近代化——北海道の東北端から魚のカレイを生かしたまま東京に運ぶ試みがなされているという——があるとは言え、食物というのは、特定の動物種・植物種であることには変りはない。

もうひとつ別の側面をながめてみよう。近代都市は高度の人工を駆使しているとはいえ、具体的には、その存在は、緯度・地形・水文などの自然的条件の影響を大きく受けている。

はじめの2つの例は、都市において高度化し、巨大化して都市を特徴づけている機能が、人間以外の生物にも共通し、広い裾野をもつことを示している。3つ目の例は、都市という社会も、生物と同様、土地の影響（あるいは非生物的条件というか）を受けていることを示している。以上の考察をふまえて以下に述べることは、都市についての結論ではなく、むしろ今後の研究課題の仮説ともいうべきものである。

一つは、経済的、文化的には都市は社会法則に従って存在しているが、総体的に見た都市は、生物的法則にも、非生物的法則にも従っていることを、あらためて見直す必要がある、ということである。しかも、それは円ぐらふの中を三つに仕切るような形で、三つの法則が存在しているのではなくて、社会的法則は生物的法則を包含し、それらはまた非生物的法則を包含するといった、ヒエラルキー的な構成になっているのであろう。

二つは、都市の機能のひとつをとった場合、それが最新の形態一色に塗りつぶされていない実態の意義についてである。その例は情報管理において明白にのべたが、物質代謝においても、あらゆる物質代謝をエネルギー代謝の形態を目標において、「近代化」することがいいことなのか、どうかを考えてみる必要があるであろう。

新旧両態が併存することの意義は、それこそ、今後の課題であるが、生物界においては、進化の過程で最も新しく出現し、かつ優先的な生物が存在する反面、古い形態のものも豊富に存在していることから、考えてみるのは有意義であるだろう。

三つは、人間から人間以外の生物にまで連なる機能の併存についてである。ごく簡単に考えても、人間の技術の新たな発展を促がす上で、互いに連なるいろいろなサンプルがあることは好都合であるだろう。

前節で、人間を自然の発展段階としてとらえ、あるいは自然は社会化されているととらえたことからすれば、社会の古い機能、人間と連なる生物の機能は、単なる参考品ではないであろう。ここにおいて、「都市の自然」

が言葉のあやとしてでなく、深く認識されなければならぬ、と思うのである。

### 3. 社会化された自然の典型としての都市

人間を単に自然の一部とみるのではなく、また、自然から生まれて反自然の方向に進んできたただけとらえるのではなく、人間を、あるいは広く人類の存在を、自然の歴史の1つの段階とみるならば、最初の節で述べた<sup>2</sup>自然<sup>2</sup>概念の複雑さ、曖昧さは解消するであろう。また、このようにみるならば、自然の社会化は論理の必然でもある。

社会の発展のなかで、新しい形態でもある都市は、都市計画論(学)、建築学ばかりでなく、いろいろの分野で検討されているが、まさにそうあるべきだろう。そのなかで、都市を社会化された自然の典型としてみ直す視点は、従来の学問の諸分野にとってどれほどの意義をもつてであろうか?

都市の自然について、生態学的な立場から関心を持っている筆者にとっては、上の視点は十分検討に値すると考えている。具体的な例をあげれば、植物の中でタンポポ・カタバミ・オオバコ等のように雑草とか人里植物とか呼ばれる植物は、進んで人間臭い環境を生育場所(ハビタット)とし、そこでの進化をとげていとされるが、これらの植物の生態の解明は、人為的産物である家畜や作物の意味を問うことと並んで、人間探求のひとつの側面でもある。生物を介して人間をみる上で、上の視点は興味深いものがある。

筆者の考えでは、環境とくに都市の環境をとらえるうえで、また、これと関連して環境教育からさらに教育を考える上で、上の都市観は検討に値するのではないかと考えている。

一方で、例えば東京都の規模について、水資源からみて1,000万の人口、したがって現在の面積が、東京の上限だとする見解、行政が見えるという意味で現在の東京は限度にきているとする見解等がある反面、通勤圏からいっても関東地方六県と山梨県くらいは東京圏とする見解、行政区画を超えて都市的生活は普遍的とする見解もある。それぞれは、どのような都市観に基いているのだろうか。

### 4. はたして接点か

小論の人間と自然の接点というとらえかたははたして妥当であろうか。発展段階からすれば、接点ということの存在は考えられるところである。しかし、接点ということからは接点の両側は、それぞれ相手とは異質のまとまりのあることが前提とされるのではなからうか。都市を

挟んで自然と社会の双方にその条件はあるだろうか。

自然の側は、生物と非生物とを含めて「ひとつ」のまとまりがあると言えなくもない。もっとも、最近では自然のあちこちに異変が生じてはいる。大気中のCO<sub>2</sub>濃度の上昇、放射能塵の普遍、有機塩素の普遍など、しかしこれらは、いずれも自然本来の現象ではなく、社会の側からの逸出である。

社会の側はどうだろうか。一例を環境面について言えば、大気汚染の軽減のために、都心部への自動車の乗入れ規制が強く要請されても、取締りが出来ないという理由で反対されることに見られるように、あるいは、七大都市の自動車の排ガス規制に、大手の自動車企業が陰に陽に反対したように、行政の縦割りや硬直化を含めて、日本の現実の都市は、はたしてまとまった社会といえるのか疑わしい。

その意味では、都市を容れ物のように見立てて云々し、自然の質の低下を云々する前に、社会の側を吟味することの方が先といえるだろう。都市の自然のありかたを検討するのも、環境問題を論じ、解決をめざすのも、社会の改革ぬきではあり得ない。

### 注

- 1) J. パスモアは本来のキリスト教は、必ずしも人間の自然支配を神が許したのではない、と論じている。
- 2) 「地球の歴史における情報の起源は、生物の発生とともにある」中川直哉氏私信。

### 文献一覽

- エンゲルス  
1970 『自然の弁証法』(菅原仰訳)大月書店、国民文庫。
- 小原秀雄  
1978 『環境と人類』共立出版。  
1979 「現代の日本と自然」『科学』49巻 pp. 602-610。
- 新村出(編)  
1969 『広辞苑』第二版、岩波書店。
- パスモア, J.  
1979 『自然に対する人間の責任』(間瀬啓允訳)岩波書店。
- 林淳一  
1979 「自然科学教育」柴田義松(編)『教科教育と教材』有斐閣。
- 柳父章  
1982 『翻訳語成立事情』岩波書店。  
『世界大百科事典』平凡社、1982年。

## THE CITY AS A COMBINATION OF HUMAN AND NATURE

Isao Mototani

Tokyo University of Agriculture and Technology

*Comprehensive Urban Studies*, No.16, 1982, pp. 143–147.

The concept of “nature” in our country, is a mixture of heterogeneous views. On the one hand, nature is understood to be all beings not artificial, and nature to be subordinate to humans, which comes from the European mind. On the other hand, man and nature are regarded to be the same. In this animistic view, man may be born an animal in his next existence, not only man but also plants and stones have minds.

The Japanese vague concept of nature is, however, expected to lead a thought that man is a developmental stage in the history of nature. And this concept will enable us to review the many problems about the city.

